

30年代の北京における銭稻孫像

— 日本人留学生の目を通して —

鄒 双 双

The Image of Qian Daosun in Beijing in 1930s:
Through the Eyes of Japanese Oversea Students

ZOU Shuangshuang

This paper discusses how Qian Daosun, famous for his translation of the *Man'yōshū*, was described in Japanese materials.

Despite Qian Daosun's contributing greatly to the translation of Japanese literary works into Chinese, he is a poorly understood figure in China as he was sentenced and sent to jail as a traitor by the Kuomintang government, which discouraged later research. There are, however, materials about Qian in Japan, written by Yoshikawa Kojiro and others, through which it is possible to understand Qian's public image in Japan and develop some idea of what he was like as an individual. Qian was regarded as a serious teacher and a kind-hearted scholar, taking care of Japanese overseas' students in Beijing. Some articles depict Qian as experiencing psychological conflict owing to his ambivalence on the tense relations between China and Japan, and that he showed indomitable courage in protecting Chinese culture from destruction by the Japanese army during the Second Sino-Japanese War.

キーワード：銭稻孫、日本人留学生、吉川幸次郎、泉寿東文書庫

一 銭稻孫研究の必要性和問題点

1946年10月20日付『大公報』第2版に、「銭稻孫公审 二十五日宣判」（銭稻孫裁判 二十五日判決）という小さな見出しの下に、「十九日午前十時に、偽北京大学学長銭稻孫は河北高等裁判所第三刑事法廷に連行され、大法廷で裁判を受け、二十五日に判決を言い渡される予定である¹⁾」と報じられている。同月26日付の同報に「懲役十年、公民権剥奪六年²⁾」という判決が掲載された。記事の主人公銭稻孫（1887-

1) 河北高等法院刑三庭十九日上午十时由第一监狱提到伪北大校长钱稻孙，在大法庭举行公审，定二十五日宣判。（1946年10月20日付『大公報』第2面）

2) 判決有期徒刑十年，褫夺公权六年。（1946年10月26日付『大公報』第2面）

1966)は、清末に活躍した外交官を父に持ち、日本で七年を含む十数年間の海外留学をした翻訳家である。文学、歴史、考古、医学といった多岐にわたる分野の訳作は二十数部に及び、特に『万葉集』の中国語訳においては先駆者的存在で絶賛を受けるなど³⁾、日本文学の翻訳に大きな足跡を残した。

しかし、研究者はこれまで彼に対し十分な関心を払ってきたと言いがたい。1989年出版の『翻訳家辞典』には銭稲孫が挙げられてはいるが、その経歴と訳作の紹介はきわめて簡略で、誤りも見られる。また、十年近くともに仕事をしてきた同僚である魯迅の『魯迅生平資料滙編』にも、同い年の叔父銭玄同に一頁余りの紹介があるのに対し、銭稲孫についての注解は五行しかない。もちろん、銭玄同は国学において大きな存在であるため、単純に並べて比較しても意味がない。とはいえ、銭稲孫への関心度が低いことは明らかである。さらに、彼を対象に記された回想文も非常に少ない。管見の限りでは、銭稲孫の清華大学時代の教え子である楊聯陞⁴⁾の「憶銭稲孫先生——兼憶賈德納」と、晩年の教え子である文潔若の「我所知道的銭稲孫」だけである。このような状況に至った要因が、冒頭に挙げた裁判である。終戦直後から1947年10月まで、中国大陸では戦争中に日本に協力した中国人が数万人規模で国民政府に裁かれた。いわゆる『漢奸裁判』である。⁵⁾ 銭稲孫もその裁判に掛けられ、それ以降『漢奸文人』というレッテルに付き纏われてきた。楊聯陞も「銭稲孫先生は日本語の一流の名教授で、抗日戦争以前に清華大学に多年勤めていた。今日の清華大学の学友はほとんど銭稲孫に言及しないようにしているが、その理由は華北地区が日本軍に占領された時、彼が偽北京大学の行政要職を担当したことにある」⁶⁾とそのわけを述べている。

関係者による記述が少ないだけでなく、銭稲孫には自身の手による日記や、自伝、そして回想録の類はまったく見当たらない。そのため、中国における銭稲孫研究の資料といえば、ほとんど雑誌に散在する、あるいは単行本になった訳作や、他人の日記や回想録に散見される僅かな言及からなる。研究資料の缺乏は研究者にとって遺憾な状況である。

近年、銭稲孫の代表作『漢訳万葉集選』（日本学術振興会、1959年）がしばしば研究者に取り上げられている⁷⁾。他方、彼自身に対する研究は以下のような数点のみである。銭稲孫研究の嚆矢とされる王文歆

3) 鄒双双「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究——成立背景、出版事情、翻訳をめぐる」(『東アジア文化交渉研究』第4号、2011年3月31日)を参照されたい。

4) 楊聯陞(1914-1990)、漢学者、経済史家、ハーバード大学教授。1937年に清華大学経済学部を卒業、1940年にハーバード大学に赴く。1946年に博士学位を獲得したあと、ハーバード大学で勤める。

5) 劉傑『漢奸裁判』(中央公論新社、2000年)を参照。

6) 銭稲孫先生在日本語文方面、是第一流的名教授，抗战前在清华服务多年。今日的清华校友很多不愿意谈钱稻孙的事，理由是在日本侵略者占据华北的时候，钱稻孙曾在伪北大担任过重要的行政职务。(楊聯陞「憶銭稲孫先生——兼憶賈德納」、蔣力編『哈佛遺墨：楊聯陞詩文簡』、商務印書館、2004年、44頁)

7) 鄒双双「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究——成立背景、出版事情、翻訳をめぐる——」(『東アジア文化交渉研究』第4号、2011年3月、97-115頁)、吳衛峰「和歌の翻訳と異文化体験の問題——銭稲孫著『漢訳万葉集選』を中心に」(『東北公益文科大学総合研究論集』第12号、2007年6月、59-72頁)、甄文康「銭稲孫の帰化翻訳思想論——以『漢訳万葉集選』為中心」(四川大学2007年修士論文)、松岡香「『万葉集』の中国訳について(その1)——銭稲孫訳を考える」(『北陸学院短期大学紀要』第2号、1989年12月、1-11頁)などある。

「銭稲孫対日本文化的訳介述評」⁸⁾は、訳作に対し基礎的な収集整理を施したところが評価されるべきであるが、訳作の成立過程に注目していない。また、邱魏は著書『吳興銭家：近代学術文化家庭的断裂与传承』（浙江大学出版社、2009年）に「銭稲孫：生平、学術和思想」章を設け、銭氏家譜の研究を通して、銭稲孫出生の家柄と家庭環境を明らかにし、銭稲孫研究の基礎を築いた。別に、銭稲孫の中国図書館での勤務経歴を述べる韦慶媛「図書館的另類館長銭稲孫」⁹⁾もある。

このように、政治雰囲気による憚りに加えて中国国内に残された資料がきわめて少ないため、銭稲孫研究はまだ初段階にありまた検討の余地が多い。例えば、彼の交友関係、日本占領下の北京に居残る理由などの問題はほとんど研究されていない。しかも、銭稲孫に対する論述は、中国一国の資料ばかりに依拠している。銭稲孫研究を一步前に推し進めるには、新たな資料と視点が求められている。

ここで注目されるのは、日本における銭稲孫関連の資料である。こちらもそれほど大量とは言えないが、銭稲孫の活動や、人物像などを異なる角度から検討することができるという点では、貴重な資料となる。これまで筆者は、これらの資料を利用し、主に銭稲孫の翻訳活動について論じてきた¹⁰⁾。本論では、銭稲孫その人にスポットを当てて、30年代の北京において銭稲孫と交わりを持っていた日本人の言説に描かれた彼のイメージを捉える。それによって、中国側の資料だけでは明らかにされていない銭稲孫像を提示する。

二 吉川幸次郎の描いた「C教授」

1 北京留学時代の恩人

長年京都大学で教鞭を執っていた中国文学者の吉川幸次郎（1904-1980）は、銭稲孫と交遊を持っていた。

吉川は1928年（昭和3年）に中国語の獲得のために、京都大学大学院生として先生の狩野直喜、貝塚茂樹に伴って北京にわたり、留学生生活を始め、1931年（昭和6年）まで約三年間滞在した¹¹⁾。彼が北京に着いた翌月の5月に、折しも中国山東省済南で日本の權益確保と日本人居留民保護という名義で派遣された日本軍と、北伐中であった蒋介石が率いる国民革命軍との間に武力衝突が起きた。いわゆる済南事変である。その後、両軍を調停する協定が結ばれたが、協定に対する不満より中国国内では反日の機運が一層高まった。そのような情勢の中で、北京大学をはじめ、各大学の授業を聴講生として受けた吉川

8) 王文敏「銭稲孫対日本文化的訳介評述」、北京师范大学中文系2006年修士論文。http://blog.cersp.com/70188/524239.aspxを参照。

9) 韦慶媛「図書館的另類館長銭稲孫」（『読書』第377期、生活読書新知三联出版社、2010年10月）92-99頁。

10) 「佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』研究——成立背景、出版事情、翻訳をめぐる——」（『東アジア文化交渉研究』第4号、関西大学文化交渉学教育研究拠点、2011年3月）、「銭稲孫と日本文人の交遊——谷崎潤一郎と岩波茂雄を中心に」（『国文学』第96号、関西大学国文学会、2012年2月刊行予定）、「銭稲孫と北京近代科学図書館」（『河南大学学报』にての掲載受理済み、刊行未定）、及び書簡翻刻の「銭稲孫訳一九五九年版『漢訳万葉集選』の成立経緯——佐佐木信綱宛銭稲孫未発表書簡十二通、鈴木虎雄書簡一通——」（『国文学』第95号、関西大学国文学会、2011年2月）がある。

11) 吉川幸次郎「留学時代」（『決定版吉川幸次郎全集22』、筑摩書房、1999年初版第五刷）370-386頁。

は、中国の学生に相手にされなかったようである。「向こうから私にたいして仲よくしようとする学生はなかったね。まあ日本人留学生というのは自衛隊員みたいな感じ」¹²⁾と彼は「留学時代」で述べている。留学中、中国人学生に警戒され、冷遇されたことは想像に難くない。

ところが、吉川は「三年の留学の間」、「たびたびCさんをおとずれた」¹³⁾と、随筆「C教授」で記している。中国人学生には敵対視されたが、「Cさん」には迎え入れられたらしい。「C教授」は1951年2月に『婦人之友』に掲載された、文字通り、ある教授すなわち銭稲孫についての述懐である。「C教授」の「C」は銭のローマスペル「chian」の頭文字であり、内容からも銭稲孫のことを指すことが判断される。冒頭の部分を見てみよう。

C教授は、中国に於ける日本文学の大家である。家は代代の学者であり、お父さんは、清朝の末年、つまり前世紀の末から今世紀のはじめへかけての、中国の外交官として、令名があった。お父さんのさいしょの任地が日本であったため、Cさんも東京で教育を受けられた。最初にはいられた学校は、慶応の幼稚舎であったという。そしてたしか高等師範まで進まれたとき、お父さんがヨーロッパへ転任されて、イタリア、ベルギーなどの公使になられたため、Cさんも各国の大学を転転された。¹⁴⁾

また、「Cさんの母堂も高い教養をもった婦人であり、その頃の中国の婦人にはめずらしく、著書がある。清朝の女流詩人の著作の解題である」¹⁵⁾とある。記述は多少些細な誤りがあるが、公使として各国を転々した父銭恂、夫に随行し見聞録『癸卯旅行記』、『帰潜記』を書き残した母単士厘、そして慶応幼稚舎や東京高等師範学校で教育を受けた、という銭稲孫の来歴と合致している。「C教授」とは銭稲孫のことに違いない。

「C教授」によれば、留学生生活を終え、日本に引き上げる前に、銭稲孫は自宅に吉川を招待したという。その三年後の1934年、日本見学のため清華大学の学生をひきいて東京に行った銭稲孫は、公務を終えた後京都に立ち寄って吉川を訪ねた。翌年、また妻の同行で日本を訪問した時、吉川に京都を案内してもらったという¹⁶⁾。30年代前半において銭稲孫と吉川幸次郎は相当緊密な交遊を保っていたことが示されている。その後、戦中から戦後にかけて二人の往来を記す資料はあまりないが、吉川幸次郎は訳作『縁縁堂随筆』の出版に際して1940年1月に記した「訳者の言葉」の中に、原作にある不得手な南方方言について銭稲孫の妻に教示を請った¹⁷⁾、というようなことを書いた。日中戦争以降も、往来が続いたことが推察される。

吉川は「C教授」で銭稲孫の両親だけでなく、彼の妻、息子、娘などにも触れており、文末で下記の

12) 前掲吉川幸次郎「留学時代」、408頁。

13) 吉川幸次郎「C教授」（『決定版吉川幸次郎全集16』、筑摩書房、1999年初版第五刷）551頁。

14) 同上、550頁。

15) 同上、550頁。

16) 同上、551-553頁。

17) 吉川幸次郎「訳者の言葉」（同訳『縁縁堂随筆』、創元社、1940年）6頁。

ように記している。

私はC家のことについて、それ以上のことを、知っているわけでない。しかし私は甚だC家の人人を尊敬する。それは何代かにわたる文化の伝統が、人間の善意に対する信頼を、つちかって来た地域にこそ、存在すべき家庭だからである。

（中略）

もし戦争さえなければ、今ごろは、Cさんの坊っちゃん、お嬢さん、お孫さん、お嫁入されたお嬢さんのほうのお孫さん、それらの何人かが、きっと京都にいられて、私の家は、しばしばその訪問をうけているであろう。そうして私と私の家族とは、それらの人人と接触することによって、日本の家庭特有の野蛮さを、幾分か矯正し得ているであろうに。¹⁸⁾

吉川幸次郎は銭家の人々を尊敬し、この家庭を人間の善意に対する信頼を持つ家庭として受け止めた。このように家族に対して好感を持つことは、銭稲孫本人の人格と人柄を尊敬するという前提が必要であろう。言い換えれば、銭稲孫は吉川幸次郎の目には尊敬すべき存在と映っていた。

銭稲孫への敬意は筆によって記されただけでなく、吉川の実際の行動にも表れている。1959年3月に、銭稲孫が二十年近くにわたり手をつけた『万葉集』漢訳がようやく『漢訳万葉集選』という形で出版されることになった。それができるまで、吉川幸次郎は骨を惜しまずに奔走した。それについて、新村出は「後語」に次のように記している。

佐佐木信綱博士をお尋ねした折に、老博士から万葉歌抄を、英訳以外に、広く亜欧米諸国語に訳出して、斯の集の精華を示したいものだ、との抱負を私に披瀝せられ、先づ以て、善隣古国の近代語に摹訳して、同国の雅友に示したい、との熱意を語られ、それには既に銭氏の佳訳の好適なるものが、存するから、それに多少の増修を煩はし、適当に按配して、速かに出版したいものだとの希望を切述されたのであった。

帰洛の後、私は畏友吉川幸次郎博士に、右の趣を告げたところ、夏季中、同博士の東上の好機に由って、現在の学術振興会理事長の高垣寅次郎博士に打ち明けられ、幸にして其の協力をも得ることとなり（中略）印刷などの形式をはじめ、現代の印刷文字界に於いては異常の困難なる校正の業に対しては、吉川博士の指導のもとに、銭先生に私淑の縁故深き、京都大学人文科学研究所助教授（中国思想史）たる平岡武夫学士に、煩些多大なる労苦をおかけしたことを感謝せねばならぬ。¹⁹⁾

銭稲孫の苦労を重ねた万葉訳歌が日の目を見ることができたのは、吉川幸次郎による学術振興会との交渉、および校正作業への協力に負うところが大きい。そのうえ、吉川は『漢訳万葉集選』の「跋」を執筆し、銭稲孫の家柄、古典の教養そして日中文学交流に対する希望を述べた。中に、銭稲孫を周作人

18) 前掲吉川幸次郎「C教授」、553-554頁。

19) 新村出「後語」（佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』、日本学術振興会、1959年3月）190-191頁。

と共に「豪傑の士」とし、日本文学に関心と尊敬を払う「先達」と見なした²⁰⁾。また、「この形によるこの書の出版が、将来へむかっての一つの画期となることを、信じまた希望する」²¹⁾とある。

「C教授」から、銭稲孫の人柄およびその家族に対する吉川幸次郎の敬意が窺えるならば、「跋」からは、銭稲孫の学問に対する彼の評価が分かる。だからこそ、30年代の交遊から二十数年も経過したにも関わらず、吉川は銭稲孫の面影を思い出し、彼の出版物のために力を尽くしたのであろう。

2 清華大学講師としての「C教授」

前節で述べたように、吉川幸次郎は北京の各大学で授業を聴講した。最も多く通ったのは北京大学文学部の授業であった。先生たちがほとんど訛りの強い南方人のため、聞き取りが難しく感じた吉川は、銭玄同の授業を気に入った。「その中で例外によくわかったのは、国語統一の本家である銭玄同さんです。といっても浙江訛りのはいった北京語ですが、大へんな雄弁で、演説みたいな講義です」²²⁾という。銭玄同は銭稲孫と同年の叔父で、ともに日本にも留学していた。吉川は二人の叔甥関係を知り、それによって銭稲孫に対し更なる関心と好感を持つようになったのではないと思われる。

折柄銭稲孫も吉川の北京留学の前年の1927年9月から清華大学外文系の講師をしていた。実際、吉川が銭稲孫の授業を受けた記録は見当たらないが、「C教授」の講義については次のような記述があり、銭稲孫の授業に対する真剣さが窺える。

Cさんは、国立清華大学の教授として、漱石その他を講じていられた。いつか講義のノオトを見せて貰ったことがある。それは詳細をきわめたものであり、漱石の作品の中に出る難解な言葉、といってもCさん御自身には難解でも何でもないが、はじめて日本語を学ぶ学生には難解と思われる言葉に、いちいち詳しい説明がつけてあり、教室の講義が淀みまごつかないように、準備してあった。私は感嘆の声をあげた、

——日本で中国文学を教えている人で、これだけの準備をして教室にのぞむ人は、まずありません。²³⁾

また、実際に授業を受けた楊聯陞の回想文からも彼の教授態度や方法を確認することができる。

銭稲孫は授業の時きちんと順序を立てて学生を導き、非常に真面目であった。文法を飽きずに解説し、会話より読み方を重んじた。彼は常々、多くの留日学生のように帰国後も普通の日本語書籍、新聞を正しい日本語で朗読することさえできず、漢字を現代中国語で読むことは、はなはだ恥ずかしいと言っていた。二年目の日文選読の授業に用いられた資料には、文学関係のものが少なくなか

20) 吉川幸次郎「跋」、(佐佐木信綱選、銭稲孫訳『漢訳万葉集選』、日本学術振興会、1959年3月)195頁。

21) 同上、198頁。

22) 前掲吉川幸次郎「留学時代」、384頁。

23) 前掲吉川幸次郎「C教授」、550-551頁。

った。例えば、夏目漱石の「吾輩は猫である」（中略）

銭稻孫はまたみんなに日本語書籍、新聞をたくさん読み、たくさん翻訳するように勧めた。²⁴⁾

銭稻孫は日本語教師として誠実な態度で授業に臨んだ。学生に積極的に翻訳するように助言したのは、彼の教授方法はもちろん、彼自身の好みの表れでもあろう。そして、日本語を教えるために、日本本土の教材を使うべきだという見解も見てとれる。学生の日本語習得を気に掛けた思いが伝わる。彼はさらに、日本語の習得や日本文化に対する理解を研究者から一般人までに促すために、日本語書籍を集める個人図書館を設けた。これについて後述する。

三 凜乎とした文人

先に述べたとおり、銭稻孫は北京留学時代の吉川幸次郎に暖かく接した。実は、吉川のみならず、銭稻孫は「北京に行くほどの人はみなこの人になんらかのお世話になった」²⁵⁾と言われるほど、多くの日本人留学生の世話を焼いた。例えば、中国文学者目加田誠²⁶⁾は「昭和八、九年のころ、チェン氏の邸に一年あまりやっかいになった」²⁷⁾という。作家中藪英助²⁸⁾も「邦字紙の弱年記者として銭稻孫の知遇を受けた」²⁹⁾。さらに、京都大学教授平岡武夫³⁰⁾は1936年春から北京留学をしており、「留学後半の一年は銭稻孫教授宅に寄寓。中国知識人の日常生活を体験したことも大きな幸せであった」³¹⁾と述懐した。ここで列挙した人以外に、銭稻孫の世話になった日本人留学生がほかにもいたと推察される。楊聯陞の回想によれば、彼が「和田〔清〕、平岡〔武夫〕以外に、銭府で会ってのちまた日本で面会した日本人学者には森鹿三、宇都宮清吉がいる。当時二人とも京都大学人文科学研究所の研究員であった」³²⁾という。また、日中

24) 銭稻孫教书循循善誘，而又非常之认真。对于文法的讲解，不厌其烦。不大注意会话，对读音却很重视。常说，有很多留日学生回国之后，拿起一本普通的日本书报来，还不能用日本音朗读，很多汉字只含混着用中国现代音读，这是很可耻的。第二年日文选读的资料，文学方面的不少，如夏目漱石的《我是猫》（中略）銭稻孫又劝大家多读日本书报，多做翻译。（前掲楊聯陞「憶銭稻孫先生——兼憶賈德納」、45-46頁）

25) 目加田誠「銭稻孫先生のこと」（『目加田誠著作集8』、龍溪書舎、1986年）121頁。

26) 目加田誠（1904-1994）、古典中国文学者、九州大学教授、早稲田大学教授。詩経、唐詩などの著書が多数ある。

27) 前掲目加田誠「銭稻孫先生のこと」、121頁。

28) 中藪英助（1920-2002）、1938年に北京へ遊学し、『東亜新報』記者を務めつつ、文学活動を開始する。1946年に引き揚げ帰国し、1950年に『近代文学』に「烙印」を発表して以来、作家生活を始める。1981年に『闇のカーニバル』で日本推理作家協会賞、1992年に『北京飯店旧館にて』で読売文学賞、1995年に『鳥居龍蔵伝』で大佛次郎賞をそれぞれ受賞する。

29) 中藪英助「過去に迫られた日々」（同『わが北京留恋の記』、岩波書店、1994年）101頁。

30) 平岡武夫（1909-1995）、大阪出身、中国哲学者。東方文化研究所研究員などを経て、1960年京都大学人文科学研究所教授となる。著作に『経書の成立』などある。

31) 平岡武夫「退官記念講演会 シナ学四十年」（『人文学報』第9号、京都大学人文科学研究所、1973年12月17日）4頁。

32) 除了和田、平岡之外，我在钱府遇到的日本学人，后来又在日本屡次见面的，还有森鹿三、宇都宫清吉，两位当时都是京大人文学研究所的研究员。（前掲楊聯陞「憶銭稻孫先生——兼憶賈德納」、48頁）

戦争が勃発した後、楊聯陞が銭稲孫に日本語の勉強相手の紹介を請ったところ、竹内好（1910-1977）を勧められたという³³⁾。つまり、銭稲孫は竹内好とも知り合いであった³⁴⁾。

このように、多くの日本人留学生が銭稲孫の世話になった。後に、彼らは留学時代のことを記す回想録の中で銭稲孫に言及している。本稿の冒頭にも述べたように、中国人による銭稲孫の回想文は極めて少ない。そのため、日本人による回想録は銭稲孫研究にとって有意義な資料と言える。しかも、日常の銭稲孫と接触したことがあるため、文章に写された銭稲孫の言動や姿も、ありのままに近いと考えてもよいであろう。

戦前二度中国に渡った奥野信太郎³⁵⁾は「満州農大の金九経教授と共に静かな先生の書齋へ、禮知らざる闖入者として立ち現れ」、「その後先生には種々御世話になった」という。その時、銭稲孫に対する印象として、「やや薄暗い書香に満ちた書齋裡に、静かな明晰な口調で、先生はいつも変ることなく話し続けられるのを常とした」、また「銭先生は枯槁の学者ではない。あくまで温かな情味を湛へた人である」³⁶⁾と記している。さらに、奥野信太郎は「燕京食譜」で美食愛好の「食通」³⁷⁾、「周作人と銭稲孫」で「劇通」³⁸⁾という銭稲孫の一面を具体例で表した。

趣味だけでなく、銭稲孫の内面に触れる資料もある。1933年頃から一年間あまり銭稲孫の家で暮らした目加田誠は「銭稲孫のこと」で、日中関係が緊迫して中国国内で抗日運動が繰り広げられていた時期における銭稲孫の姿を描いた。多少長いが、目加田の目撃した具体的な事を以下に掲げる。

日本の中国侵略はいよいよ露骨になり、中国全国に抗日の運動がさかんであった。われわれが北京大学にかよっても、学生の空気はなんとなくけわしかった。親日家といわれたチェン・ダオスン³⁹⁾氏のもとには、毎日のように、ものすごい脅迫状が舞い込んでいたのを、わたしはちっとも気付かなかったのである。あるときのごときは、日時を指定して、氏を暗殺するという前ぶれがあったそうである。しかるにチェン氏は、一言もわたしにそれをいわず、そぶりにすら見せなかった。だからわたしは、いい気持ちで世話になっていたのである。

ところが、わたしが北京を去るまぎわになって、そのことを他所で聞いた。チェン氏がいかに危険にさらされ、いかに日中のあいだに立って苦しんでいるかを。ある日のこと、食事の最中、わたしは心のすまなさから、中国人の排日運動のあまりにひどいことをうらんだ。するとチェン氏は、突如起ちあがってわたしを見すえて、こう言った。

「あなたのような人までがそんなことをいうのですか。われわれ中国人の心をじゅうぶん知ってい

33) 七七之后、我曾请钱先生介绍一位日本学者交换语文，他介绍了东京大学的竹内好。（同上、48頁）

34) 竹内好と銭稲孫はともに北京近代科学図書館で日本語講座の講師をしたことがある。（『近代日中関係年表』、岩波書店、2008年第2刷、553頁）

35) 奥野信太郎（1899-1968）、東京出身、中国文学者、随筆家、1948年慶応大学教授になる。

36) 奥野信太郎「燕京食譜」（同『随筆北京』、東京：第一書房、1940年3月）41-42頁。

37) 同上、42頁。

38) 奥野信太郎「周作人と銭稲孫」（同『随筆北京』、東京：第一書房、1940年3月）67頁。

39) 銭稲孫の名前の中国語読みをカタカナで表記したもの。

てくれるはずのあなたが！」

そしてハラハラと涙をながした。わたしは青くなる思いで頭をたれ、一言も返しえなかった。

そういえば、がんらい宴会の酒に酔わぬはずの中国人であるチェン氏が、一度、めずらしく酔ってきて、大声で、「刀を出せ、早く出せ、おれを死なせてくれ」とさげんでいるのをきいて、そのときはおかしく思ったが、やはりチェン氏の苦しい心情のあらわれであったかと思ひ知った。⁴⁰⁾

叫び声などの細部まで生々しく描写したこの文は、いかにも小説のように見える。しかし、自分の目で目撃し自分の身で体験したため、目加田は上記の事柄を深く心に刻み文章に記したのであろう。これは目加田の捏造した架空話とは考えにくい。

目加田の記述によれば、日中間に険しい雰囲気漂っていた日中戦争勃発の前に、多くの日本人と接触し、彼らの世話をしていた銭稻孫は、普通の中国人に「親日」として嫌われており、身の安全も脅かされていた。中国と日本の狭間に置かれた彼が、辛い思いをしていたことも窺える。おそらく、引き続き日本人と付き合いるか、それとも完全に関係を断ち切って、日本人と敵対するか、といったような難題が、彼を悩ませたのであろう。結局、悩んだところで、答えが見つからない故、「刀を出せ、早く出せ、おれを死なせてくれ」と叫び暴れたのではないか。

戦中において銭稻孫がどのような心構えで日本占領下の北京に居残り、日本人、日本軍と向き合ったのかは、未だに明らかになっておらず、あくまで推測するほかないが、下記の鄭振鐸の見方は当時の多くの中国人の意見を代表していると言える。

銭稻孫、国を裏切るもう一人。かつて、偽北京大学のある教員が本名を使うのを嫌がり、彼に偽りの名前を使うのを要求した。なぜなら、将来、中国の政府が北京に戻ると問題になるのを恐れたからだ。しかし、銭稻孫は「あなたはそう思うの？僕は一度もそう思ったことはない」と言った。彼達〔周作人と銭稻孫 - 筆者注〕は「中国の運命」を堅く信じているから、敢えて漢奸になったのだ。これはおそらく漢奸が生まれる原因の一つだろう。⁴¹⁾

鄭振鐸からみれば、銭稻孫は中国が必ず日本に敗れると信じていたため、「漢奸」になった。しかし、目加田誠の見た銭稻孫はそうではなかった。

それからわたしは帰国し、まもなく日支事変になった。昭和十七年のころ、ちょっと北京に行ったが、そのおり、チェン氏は北京大学の総長になっていた。一日チェン氏をたずねると、氏は、いま日本軍が中国に侵入してあばれているが、これはとなりの悪童がこちらの庭に入りこんで荒らし

40) 前掲目加田誠「銭稻孫先生のこと」、121-122頁。

41) 銭稻孫、另一个背叛祖国的人，曾对一个伪立北京大学的教员——那一个人不愿用真实的姓名，要求改用一个假名字应聘，生怕将来政府回来了，会有问题——说道：“你以为会这样的么？我从来没有作此想过！”因为他们是那末坚定的相信“中国的命运”，所以他们才敢于做汉奸。这恐怕是汉奸产生的原因之一。（鄭振鐸「惜周作人」、《鄭振鐸文集》、人民文学出版社、1983年、183頁）

ているようなもので、今に疲れて引きあげるでしょう、と言っていた。当時、北京に来ていたある日本の文化人が、わたしに言ったことばに、「チェン・ダオスをたおさねば、北京大学は日本のものにならぬ」と。この人物は戦後日本で、民主主義の本家のような顔をして、いまも活躍をしているが。

たしかに、日本の軍部などは、チェン氏をおさえつけようとしたのだ。しかし、チェン氏にしてみれば、日本と親しい自分がこの際出て、日本人の中国文化破壊にたいして身をもって防波堤となろうとしたことはあきらかである。このときにあったチェン氏ほど苦しい表情をしていたことはない。しかし、時流にのったものとして、悪口をいう人は多かったのである。⁴²⁾

目加田誠によれば、錢稻孫は当時、日本軍の中国への侵入を「となりの悪童がこちらの庭に入りこんで荒らしているようなもので、今に疲れて引きあげる」ことと見て、日本軍の侵略の意味を十分に認識しておらず、日中戦争の長続きも予想していなかったようである。現在にしてみれば、錢稻孫は時代を見通す力が欠けていたと言える。しかし、これは、鄭振鐸の言うような、彼は中国がかならず負けると確信した、ということとは根本的に意味が違う。

さらに、「チェン・ダオスをたおさねば、北京大学は日本のものにならぬ」という言葉を聞き、錢稻孫の苦しい表情を見た目加田誠からみれば、錢稻孫は日本と親しい立場を利用し、北京大学を守って日本人の中国文化破壊を阻もうと努力していたのである。とにかく、彼の目には、錢稻孫が他人の言う「時流にのった」ものではなかった。

折柄、中蘭英助も「周作人を支えて荒廃せんとする学問の府を守り、占領者の日本人に対しても凜乎として齒に衣着せぬ心意気の文人だった」⁴³⁾と、錢稻孫の風貌を偲んだ。

日中戦争において、中国人と日本人の立場はおのおの異なるため、錢稻孫を見る角度も違う。しかしながら、本人の心持ちを知らず、遠くからの推測より、その場その時に身邊にいた人が描いた錢稻孫のほうが、本当の姿に近いと考えてもよいであろう。

四 最大の個人書庫の持ち主

これまで主に北京に滞在していた日本人留学生の回想録によって彼らの目に映った錢稻孫の姿を追ってきた。実は日本において錢稻孫に関して個人の資料だけでなく、彼と日本外務省の往来を記録した公的資料もある。これについては別稿で論じたいが、ここで一例として外務省資料を用いて錢稻孫が30年代に立てた個人書庫を見る。

楊聯陞は「憶錢稻孫先生」で錢稻孫の書庫について「およそ1921年に自宅（東廂房）に「泉寿東文藏書」を設け、日本書籍を集め、人々の閲覧に供した。おおむね文学と歴史の図書であり、藏書が豊富な

42) 前掲目加田誠「錢稻孫先生のこと」、123頁。

43) 中蘭英助「過去に迫られる日々」(同『わが北京留戀の記』、岩波書店、1994年) 105頁。

だけに、個人書庫として当時においては国内最大かもしれない⁴⁴⁾と書き表しているが、詳細を記していない。また、ほかの中国語文献にもそれについての詳しい情報が見つからない。「幻」の書庫と見なしてもよい。

幸いに、1930年9月5日付、外務大臣宛在中日本公使館の報告書「支那人の日本語及日本事情研究状況調査」には、泉寿東文書庫が「北平に於ケル日本語及日本事情研究状況」⁴⁵⁾の一項目として報告された。そこには、書庫の創立目的、規模、経営方法などについて記されている。全文は下記のとおりである。

泉寿東文書蔵（泉寿東文書庫）

本書蔵ハ昭和五年一月錢稻孫カ其ノ私宅ニ開設セル私設図書館ナリ創設ノ際同人カ各方面ニ送附セル泉寿東文書庫創立趣意書ノ要旨次ノ如シ

輓近日本出版事業ノ進歩ハ実ニ驚嘆スヘキモノアリ我国ノ學術文化ノ日本書籍ニ依リ裨益セラレタルトコロ極メテ甚大ナリ而シテ学都北平ニ於ケル著名ナル図書館亦頗ル日本書籍ノ蒐集ニ努メツツアリト雖其ノ類自ラ専門ニ傾キ一般ノ研究ニハ未タ便ナリト云フヘカラス不肖茲に顧ミ斯友有志ニ諮リ二十年来購読積藏スルトコロノ日本文書籍ヲ基礎トナシ泉寿東文書庫ヲ創設シテ之ヲ公開シ以テ聊カ此不便ヲ補ハムトス

(一) 本書庫ハ専ラ日本人ノ著訳ニ成ル図書蒐集ヲ主トシ傍ラ東方研究ニ関スル各国著書ヲモ蒐集ス

(二) 本書庫ハ日支学者ノ為學術研究ノ便ヲ謀ル本書庫ハ學術雑誌図書ヲ刊行紹介シ其ノ他學術ニ有益ナル事業ニモ順次着手ス

本書庫ハ希望ニ依リカノ及フ限り日支両国学者ノ聯絡ヲ謀ル

(三) 本書庫ハ一般ノ閲覧ニ公開ス

(四) 本書庫ハ当分北平西四牌楼受壁胡同錢宅ニ設ク

本書庫ハ創設草々ニテ専ラ書籍ノ蒐集及取次ヲ行ヒ居レル処当初錢稻孫ノ蔵書五百余部ナリシモ其ノ後大阪毎日新聞社、東洋文庫、中日文化協会、東亜經濟調査局其ノ他個人等ヨリノ寄贈アリ現在約二千五百部ニ達シ居ル由ナリ又書籍ノ取次ハ日支両方面ニ支那若クハ日本ノ書籍ヲ取次クモノニシテ本書庫ノ經費ハ主トシテ右取次料ニ依リ居レリ尚北平東城西堂子胡同中華公寓内字紙簍社發行ノ日本文月刊小雑誌字紙簍ハ本書庫ノ機関誌ト見做シ得ヘシ

この報告によって錢稻孫書庫の実態が少し浮かび上がる。錢稻孫は1930年1月に北京西四牌楼受壁胡同⁴⁶⁾の自宅に泉寿東方書庫を設立した。自宅は「祖父以来のお邸であろう、全部で百何間かある大邸

44) 大约从1921年，就在家裏（东厢房）設立“泉寿東文藏書”，搜集日本書籍，供人閱讀。大略以文史方面為主，內容之豐富，就個人圖書收藏而言，在當時可能是國內最大的。（前掲楊聯陞「憶錢稻孫先生——兼憶賈德納」、45頁）

45) 1930年9月5日付、外務大臣幣原喜郎宛在中日本公使館報告書「支那人の日本語及日本事情研究状況調査」、機密第八二五号。

46) 現在の北京西四北四條23号にあたる。

宅」⁴⁷⁾と言われる。各界に配布した設立趣意書によれば、設立理由は、出版事業が発達している日本の書籍は中国の学術文化に大いに益があるが、北京に収集されたのが専門書に傾き、一般の研究に不便だという実情があり、その欠点を補うためだという。創立当初、書籍は銭稻孫の個人蔵書500冊と、大阪毎日新聞社、東洋文庫といった日本組織及び個人からの寄贈書からなり、合わせて2500冊であった。図書は、主として日本人の著訳で、そのほかに、東アジア研究に関する各国の著書も集められていたという。書庫は学術図書を刊行、紹介し、一般人にも公開する。「北平東城西堂子胡同中華公寓内字紙篋社発行ノ日本文月刊小雑誌字紙篋ハ本書庫ノ機関誌」だというのが、機関紙は未見である。

書庫の設立経緯はだいたい以上のようなものである。

外務省の報告書と楊聯陞の文に記された設立時間がそれぞれ「1930年」と「1921年」となっており、食い違いがある。銭稻孫自身の状況と資料の信憑性から考えれば、「1930年」のほうが正しいと思われる。「1921年」というのは、楊の覚え違いであろう。注目すべきところは、書庫がいずれの資料にも「国内最大の書庫」と評されている。

惜しまれることに、銭稻孫が苦勞して集めてきた書籍は1946年の裁判後、全部没収された。50年代に彼は散失した本を探したが、行方が確認できなかった。文潔若は次のように回想している。

銭稻孫の給料は基本的な生活費以外に、ほとんど購書に使った——大部分は日本語書籍で七つの大部屋に積まれている。彼は早年図書館を設立しようと考えた。日本が敗戦した後、彼は国民党に漢奸罪で投獄され、本も全部没収された。後病気で保釈され治療を受けた。50年代、彼は幾度も北京図書館や王府大街の科学図書館に本を探しにいったが、行方を突き止めることができなかった。⁴⁸⁾

五 おわりに

本論は、中国語資料のみに依拠する中国国内の銭稻孫研究で解明されていない銭稻孫の姿を、日本で発見した日本側の資料、特に30年代の北京において銭稻孫と交流があった日本人留学生の回想文を利用して追ってみた。

銭稻孫と交遊を結んだ吉川幸次郎は、留学時代のひとりの恩人と見るだけでなく、その家族を尊敬し、彼の学問にも敬意を抱いた。そのため、銭稻孫の『漢訳万葉集選』の出版のために奔走した。吉川の記した「C教授」を通じ、日本語教育に取り組んだ清華大学時代の銭稻孫の誠実な姿が浮き彫りになる。また、銭稻孫は、奥野信太郎をはじめ、目加田誠などといった、北京に来ていた留学生や研究者の世話をした。それらの人の回想文には、彼らが日常に接触した銭稻孫の姿が描かれた。「日本語堪能」「食通」「劇通」という表面的な特徴以外に、日中関係が思わしくない時の銭稻孫の内面的な煩惱と葛藤も示され

47) 前掲吉川幸次郎「C教授」、551頁。

48) 他本人的工资除了养家糊口，全部用来买书了——绝大部分是日文书籍，堆满七间屋子，早年他曾计划建立一所图书馆。日本投降后，他被国民党以汉奸罪关入监狱，书也全部被没收。后来因医保外就医。50年代，他多次到北京图书馆和王府大街的科学图书馆去查找这批书，始终没有下落。（文潔若「我所知道的銭稻孫」、陳遠編『斯人不在』、桂林：廣西師範大学出版社、2006年、211頁。）

た。さらに、中国語資料にしばしば言及されながら、詳細不明な銭稻孫の泉寿東文書庫については、日本外務省の報告書によって、その設立目的や、運営方式などを明らかにした。個人書庫の設立は、日本研究に熱心で、日中文化交流のために力になりたい、という銭稻孫の気持ちを物語る。

このように、日本語資料を用いることで、学問的かつ日常的な銭稻孫像を捉えることができ、人間としてのより豊かな銭稻孫に近づくことができると考える。今後は、日本政府の持つ公的資料をも使用し、彼と日本との関係をより一層明らかにし、それらの関係に込められた銭稻孫の思惑を考えたい。

